

土門 剛



土門 剛 どもん たけし

【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

め、売れ残りがないようにしていたからだ。

20年産JA概算金はアテにならない

概算金と買取価格の違いについて説明しておこう。概算金は仮渡金とも呼ぶ。最終価格を予想して、その9割以上を出荷前に支払う。年末に1回目の精算があり、最終精算が翌年に繰り越すこともある。ここ数年、1回目の精算では数百円程度の追加払いがあった。下げ相場で概算金を高めに払った20年産は、早くも追加払いはないと生産者は諦めた。

一方の買取価格。商人系業者の集荷は追加払いなしが基本と言われてきたが、最近ではJAとの対抗上、払うケースもある。逆にJAが、追加払いなしの買取価格一本で集荷するケースがわずかに増えている。この場合は、全農を通さない卸業者などとの直接取引が多い。

買取価格決定に際し、相手先と価格交渉があるので、安定した取引ができる。いずれにせよ「JA⇨概算金集荷」という安易な区分けはでき

なくなってきた。

さて、全農にいがたのJA概算金が、相場実勢を反映したものでどうか。下げ幅を参考に分析してみたい。JAかとりが相場実勢を反映したものと単純比較では、あきたこまちの下落幅なら、新潟コシヒカリ一般は1俵1万3410円になる。600円近い奮発だ。

新潟のJAが組合員に示す「生産者概算金」は通常、JA概算金に100円から200円、ときには500円程度加算する。加算金200円とすると、仕入れ値は1万4200円。これを前提にした卸などへの販売価格は、消費税分（8%）を含めた1万5836円。もちろん経費抜きで裸の価格だ。卸など向け新潟コシヒカリ一般の通り相場は、9月29日時点で「税別・置き場渡し1万4000円台前半」（県内集荷商）。これでは集荷商は完全に経費倒れで赤字になる。

商人系業者は対抗上、JAより高く買わざるを得ない。そうでないと集荷できないからだ。通常、JAの「生産者概算金」より数百円高い買取値を提示してきた。JAよりコスト競争力があるとはいえず、その価格で買い取れば、確実に赤字になる。現に関東某県の商人系業者が構成する集荷団体で資金ショートが起き

20年産の新米相場の口火を切ったのは、全農にいがた。お盆明け直後の8月17日、県内JAに示す「JA概算金」は、上越地区から下越地区にかけて栽培されるスタンダードな「コシヒカリ」一般は、1俵（60kg・税込み）で1万4000円。19年産より900円安く、下げ幅は6%。前年を下回るのは6年ぶり。

その翌日、千葉最大の集荷激戦地に本拠を置くJAかとりが、生産者に示した「生産者買取価格」を通知。収穫期が早い「ふさおとめ」と「あきたこまち」でいずれも1万2600円。ただ下落幅は違った。前者は1200円で8・7%、後者は14

00円で10%。競合産地があるあきたこまちの方が下げ幅を大きくした

ようだ。9月1日に決まったコシヒカリは1万3000円。あきたこまちと同じく1200円ダウン。下落幅8・5%だった。

どちらが相場実勢を反映しているか。紛うことなくJAかとりの方だ。ここは全農には頼らず米卸などと直接取引。買取価格なので、当然、買い手の卸などと価格を相対決

高額概算金で赤字を出しても

農家に損失飛ばしで帳尻合わせ

た。幸い1週間から10日程度の支払い遅延で済んだが、JAと張り合っ
て集荷したところ、運転資金が一時
底をついたというのだ。

表1は、主産地のJA概算金を公
表・判明日別に時系列で並べたもの
である。相場に照らして金額が妥当
かどうか。「6月末在庫」と「20年
産作付意向」を併記しておいた。前
者は昨年産米の販売状況をつかむ手
がかりとして昨年同月と比較、後者
は生産調整の進み具合を示す。

大量在庫を抱える東北 狼狽売りで価格暴落も

下げ相場どこ吹く風と昨年産と同
額の金額を出してきたのは富山、石
川、福井の北陸3県。コロナ禍のコ
メ需要停滞の中で、北陸3県が軒並
み強気に打って出たのは、多分に在
庫事情を考慮してのことらしい。確
かに6月末時点の前年同月比で新潟
や東北6県と比較にならないくらい
水準が低い。富山2・7%増、石川
0・3%減、福井2・8%増。在庫
水準では合格ラインだ。

ちなみに在庫水準ワースト・ワン
は新潟の36・6%増。東北6県は新
潟を追う形で山形33・6%、岩手
26・7%、宮城25・2%などと続く。

一方、優等生は4・1%減の千葉。
それでもJAかとりは買取価格を昨

■表1：全農やJAによる主産地の概算金・買取価格

日付	全農・JA	銘柄	金額	対前年比		6月末 在庫%	20年産 作付意向
				下げ幅	下げ率		
8.17	全農にいがた	コシヒカリ	14,000	900	6.0	36.6	前年並み
8.17	JA福井県	コシヒカリ	13,200	据え置き		2.8	減少
8.18	千葉・JAかとり	ふさおとめ等	12,600	1,200	8.7	-4.1	前年並み
8.20	全農とやま	コシヒカリ	13,000	据え置き		2.7	前年並み
8.21	全農いしかわ	コシヒカリ	13,500	据え置き		-0.3	前年並み
8.25	全農いばらき	コシヒカリ	12,500	800	6.0	7.3	減少
8.28	全農とちぎ	コシヒカリ	12,400	1,000	7.5	-3.1	前年並み
8.29	ホクレン	ななつぼし	13,200	300	2.2	1.3	減少傾向
9.01	千葉・JAかとり	コシヒカリ	13,000	1,200	8.5	-4.1	前年並み
	全農長野	コシヒカリ	12,832	480	3.6	15.0	前年並み
9.05	全農みやぎ	ひとめぼれ	12,600	700	3.6	25.2	前年並み
9.08	全農福島	コシヒカリ	12,600	700	3.6	24.2	減少
9.11	全農あきた	あきたこまち	12,700	600	4.5	20.0	前年並み
9.12	全農山形	はえぬき	12,200	800	6.2	33.6	前年並み
9.15	全農あおもり	つがるロマン	11,600	800	6.5	17.3	減少
9.18	全農いわて	ひとめぼれ	12,300	800	6.1	26.7	前年並み

注1：日付は公表か組合員による判明時期。千葉・JAかとりは千葉県全体。全農福島のコシヒカリは中通り・会津。概算金は1俵60kg・税込。6月末在庫は前年同月比の増加率、20年産作付意向は6月末現在（農水省調査）。

注2：千葉・JAかとりは全農県本部が機能していない、JA福井県は県域レベルでの合併直後という事情もあって県本部が存在しない、JA福井県は経済連の米穀事業をそのまま引き継いだので、それぞれ生産者概算金を示した。

年産より1割下げてきた。マーケッ
ト全体を見ての判断とは、こういう
ことを指す。在庫水準だけで概算金
を決めるのは、まさに木を見て森を
見ず。JAの集荷シェアが軒並み7
割台の農協王国ではマーケットをみ
る目は養われないのかもしれない。
大量の在庫を抱える東北6県はま
さに危機的状況。価格崩落の特別警
報が出てもおかしくないのが、新潟
に次いで在庫を抱える山形だ。収穫
シーズンに突入したというのに、農

協の倉庫には売れ残ったコメが山と
積まれている。とくに深刻なのは庄
内と最上の2地区だ。主力品種「は
えぬき」が目立つ。学校給食やコン
ビニ向けだったが、学校の長期休校
や、自粛によるコンビニの売り上げ
減退などで卸から大量のキャンセル
を喰らっている。
全農山形が示したはえぬきの概算
金は1万2200円。前年産より8
00円、6・2%マイナスだ。厳し
い在庫水準からすると、もっと下げ

ていてもおかしくない。その山形は、
8月15日現在の作柄概況では「やや
良」。

急遽、営業倉庫を借りて、古米を
一時疎開させ、新米の収納スペース
を空ける懸命の努力がどの農協でも
みられる。倉庫代は1俵につき低温
倉庫なら月100円。そのうち倉庫
代に耐えられず投げ売りが始まる
という情報もしきりに流れている。

現物市場の不在、先物市場の実力
不足、その中でもっとも憂慮される
のが「狼狽売り」だ。資金と倉庫が
引き金になる。山形の場合なら、新
米収容スペースを空けるため、古米
から投げ売りを始める。あるいは運
転資金確保のため手持ち在庫の投げ
売りを始める。買い手の卸などは、
狼狽売りをチャンスとみて新米には
目を向けない。安い古米を拾って利
益確保という動きが出てくる。こう
して売りが売りを呼ぶのだ。

全農を頂点とする 系統米流通弱体化さらに

概算金のことを調べていて分かっ
たのは、JAに対する全農の掌握力
が極端に弱くなっていたことだ。深
刻な下げ相場にもかかわらず、相場
実態に合わせて概算金を低めに誘導
することができていない。県本部の
方針もバラバラならJAの動きもバ

■表2：秋田のJA概算金と生産者概算金（あきたこまち）

全農あきた	12,600
あきた北	12,100
あきた湖東	12,400
あきた白神	13,000
うご	12,100
かつの	12,100
こまち	12,300
大潟村カントリー公社	13,500
秋田おぼこ	12,050
秋田しんせい	11,990
秋田たかのす	12,100
秋田なまはげ	12,100
秋田ふるさと	11,000
秋田やまもと	13,000

ラバラだ。県内13JAの秋田が格好の例だ。表2は、全農あきたのJA概算金1万2600円を参考に12JAが打ち出してきた生産者概算金を並べたものだ（JA大潟村は米穀事業がないので大潟村カントリーエレベーター公社をピンチヒッターに）。その額は幅広い。1万1000円から1万3500円だ。秋田は新潟と違って、生産者概算金はJA概算金を下回るのが通例。東北は概ねそのようだ。その差は、JAによる手数料・経費の徴収時期による。新潟は、生産者概算金を渡し、手数料・経費は年末の精算時に差し引くが、東北は概算金を渡す時に差し引いておく。それも全額ではないケースが一般的。残額は精算時に調整する。例えば宮城のJA加美よつば（色麻町）のケース。全農みやぎは「ひとめぼれ」1万2600円のJA概算金を示してきた。これに対しJA加美よつばは、そこから600円を

「留保金」という名目で差し引いた1万1800円を生産者概算金として組合員に示している。さて秋田の生産者概算金に話を戻そう。目を引くのは最安のJAふるさと（横手市）だ。JA概算金とのギャップは1400円もある。実は、このJA、全農から米卸へ出荷先をシフトしてきた。取引相手は米卸大手のヤマタネ（東京）がメインだ。業務用はほぼ全量、全農を通さず販売する。調査時点では、あきたこまちな生産者概算金は1万1000円だが、最終的には1000円の追加払いがあるらしい。昨年は追加払い同じく1000円を加え、1万3000円だった。最終価格ベースでの比較は、昨年産比7・7%減だ。全農を通さない分、手数料・経費を圧縮することができ、生産者へは近隣JAを上回る金額になる。

逆にJA概算金を上回ったのは、大潟村公社の1万3500円、県北地域のJA白神（能代市）とJAやまもと（三種町）の1万3000円。いずれも玄米だけでなく白米の販売に力を入れている。JA白神が全農を通さず直接販売するコメは、全体の7割程度。その

分は、共同計算と呼ぶ全農出荷による手数料や経費の一部を省くことができる。そのメリットは19年産で1俵当たり872円もあった。その大半は生産者へ還元している。全農あきたの集荷シェア。総合農協統計表によると、18年度は55・2%。10年前の09年度は64・4%。米価下落が続くと、全農の集荷シェアはさらに落ち込み、全農を頂点とした系統米流通がなお弱体化していくことは目に見えている。

損失飛ばしのカラクリ 手数料・経費の水増し

最後にマーケットを完全無視して高額概算金で集荷する全農・JAの帳尻の合わせ方を披露しておく。結局、彼らは自分の腹を痛めずに、生産者に押しつけてしまうことだ。お得意の組合員への「損失飛ばし」で

ある。たまたま入手した新潟・JA北魚沼が8月に作成した「令和2年産米 共同計算における流通経費項目別単価見直し」と題した資料（表3）が動かぬ証拠。それも年末の精算時点で手数料・経費の水増しで損失を押しつけると予告している。

説明は不要だろう。仕入れと販売に伴う差損分を、いともたやすく組合員に転嫁している。どれだけ損を押しつけるか。18年産の実績数字を付け加えておいた。販売価格は下がっているのに、全農やJAの手数料・経費は逆上がっている。そのギャップは半端ではない。851円もある。高値集荷の顛末が、これだけの売買損になることを予告しているようなものだ。こんな横着な損失飛ばし。いずれ生産者から、倍返しだ！とやり返されるだけだ。

■表3：JA北魚沼 共同計算における手数料・経費の比較

手数料・経費項目 (コシヒカリ1等60kg)	20年産	18年産
		17,000
全農手数料	143.0	67.1
JA手数料	770.0	751.2
仮渡金金利	87.0	28.5
保管料・入出庫料	374.0	262.8
運賃	490.0	166.6
集約保管等経費	110.0	—
安全安心等検査費用	12.0	—
広告宣伝費等経費	32.0	77.9
その他全農控除額	—	20.7
事故処理費用	1.0	—
審査委員会費用	1.0	—
積立金※	200.0	—
農政対策費	10.0	10.0
検査手数料	74.0	72.0
JA立替金	—	14.6
販路拡大・事務経費	—	14.3
食味向上対策費	—	132.6
その他経費	166.0	—
合計	2,470.0	1,618.3

※正確には「米穀周年供給需要拡大支援事業に係る積立金」